

「名物茶入」の話

茶わんや乃生

君の書く話は題を見ると馬の間を馳騒して己が生命を惜しがるが、代用品萬能の時代だ、活字になつたら讀んでやるよとおしやる方、なにかにしも非ず、依つて現はれ出でました。今度は少し方面をかへまして名物のこと書かして頂きます。

面白そうだが、讀んでみると鴻毛の軽きに置き、偉功を一堅苦しいが、代用品萬能の時代だ、活字になつたら讀んでやるよとおしやる方、なにかにしも非ず、依つて現はれ出でました。今度は少し方面をかへまして名物のこと書かして頂きます。

「名物」と申しまして、名物のうまいものなし」と申す「名物」と違ひまして、相手は何萬圓、何十萬圓と値する恐ろしい「名物」で、茶人の間で申される、陶磁器の「名物茶入」のことをこれか

ら暫らく書いて見やうと存じた次第であります。

時節柄「何だ悠長な話を」と思はれる向もあるかと存じますが、私達の中學の大先輩と並び稱される、八代海軍大將がかつて日露戰争の日本海々戰の最中、明月の夜軍艦上で尺八を吹いたと申される話もあります如く、動中、静かと思つたわけあります。即ち茶道は東山時代に勃興し、利休によつて大成せられ、今日まで連綿と相傳へ來る、日本特有の藝術で、實られた日本特有的藝術で、實に大和民族に必要缺くべからざる存在であり、精神的修養がある存在であり、精神的修養があり、この「名物茶入」は家常用の清規によるところが多いのであります。

然し決して禪宗ののみ相傳してゐるのではなく、花は紅、柳は綠、春夏秋冬、四季の風物、悉く茶道ならざるはない謂ふべきであります。この如き融通無碍、端的悟入を旨とする茶道は、千葉萬

茶入の底一本とすべきものであります。

◆

名物と中興名物

以前のものを大名物(オホメイブツ)といひ、利休の選定したものの中興名物(チウコウメイブツ)と申しますが、今は

大名物と名物を併稱してたゞ名物と申します。

天下を風靡して、その流行は社會大勢の趣く所必然の結果として、茶碗と茶人の需要は高められ、唐物茶人より傳はり、日本内地では、瀬戸、

唐津、薩摩、京都、萩、等を始めとして全國到る所に盛んとして、茶業發達の一大全盛期を現出し、現在今まで傳はつてゐるのであります。

この小さい茶入に傳はる物語を通して見ても、日本人が古來、外國のものを採り入れて、應用する才能を有する點及び歴史を尊び、武人と謂へども、風流を愛する點を多少過ぎるかと思ひますが以下とも、巧みにこれを日本化して、應用する才能を有する點

とも、巧みな筆から見出され得る所であります。大部分書き立てる氣持で、少し俗っぽいですが、この「名物茶入」は、傳はる物語でも讀んで頂かう

誰が定めたものかと申しますと、台帳となるべきものに、『玩物名物記』といふものが

●東京濱大謙一齋七十仙、仙九十九仙、●マヂ貝(以下何れかと並び、花札其他

●新荷着! 海老、コルビナ

●新荷着! 海老、コルビナ